

重田 昇

ビッグ・バンの風に吹かれて

葉

小川和佑
菊田 均
紅野敏郎

1991

*
沖積舎

重田昇の人と作品

小川 和佑

いまは昔、という書き方はどうも説話染みるが、いまから二十年前、一九六〇年代後半から七〇年にかけて、若い同人雑誌に考えられないほどの活性があった。

この時代、戦後最後の政治の季節だった。——全共闘の時代といっても、現在の学生たちには具体的な説明をしても、なかなか理解できない。あれは昭和史の中の大いなる夢幻劇だったのだろうか。青年たち、学

生たちはなにか内的衝迫に憑かれたように表現を求めてリトル・マガジンをひっ下げて登場した。一部のマスコミ人たちはそれを文学ゲリラと冷笑していたが、そこには既成の文芸雑誌・詩誌、あるいは高齢化した同人雑誌にない新しい文学があった。それは若い知の時代でもあった。

支路井耕治、富沢文明、吉岡良一らの詩、中上健次、立松和平、重田昇、四城重儀の小説、伊藤章雄の評論、それらはいずれも苛烈なまでに鮮明な新しい文学だった。

重田昇はその中で最も注目すべき次代の文学の創造者であろうと思われた。前記の詩人や作家たちが、それぞれ次つぎと詩集や小説集を世に送っていたころ、